

KAAT 神奈川芸術劇場 芸術監督 白井晃 インタビュー



劇場をさらに成長・進化させ続けるために考えたこと

K A A T
A R T I S T I C
D I R E C T O R
A K I R A
S H I R A I
I N T E R V I E W

アーティスト・スーパーバイザー（芸術参与）として2年、芸術監督として5年。

白井晃とKAAT 神奈川芸術劇場との密な関わりは、およそ7年となり、そのラストイヤーも半ばを過ぎた。

感染症禍により延期や中止の作品が相次いだ春夏、復活の秋を経て、警戒の冬、そしてバトンを渡す春へ。

数多の作品、次代を担うクリエイターたちとの邂逅、劇場の在り方を内と外、

双方向に働きかけながら考え続けた芸術監督の時間は、容易にはまとめられない。

だからこそ今この瞬間のアーティスト・白井晃の在り様と、その内に沸々と沸く「未来への想い」を訊いた。

取材・文：尾上そら 撮影：平岩享

— 外部からは大変な仕事量の7年と見えますが、白井さんご自身にとっては瞬間だったのではないのでしょうか。

白井 振り返ると事業も作品も数多ありますが、個人的には“何ができて、何ができなかったか”というところに集約する気がしています。KAATに来た当初は、僕の中にまだ「芸術監督の仕事とはなんぞや?」という疑問がある状態だった。ただ幸運なことに僕には、それまでに公共と民間両方の芸術監督を置く劇場で、仕事をさせていただく機会が多くあった。鈴木忠志さん、蛭川幸雄さん、串田和美さん、佐藤信さん、栗山民也さん、野村萬斎さんら出自も志向もそれぞれの芸術監督、その仕事ぶりを間近にして得た経験から、イトコ取りをしつつKAATにとって良いこと・必要なことが何かを考えていたのが参与の期間です。

そこから生まれた最初の指針が「独自性の高いプログラムの創造と、それを劇場内で共有すること」でした。公共劇場の場合、立地する地域の性質や連携すべき市民性などにより活動の指針が変わってくる。横浜という東京の近接圏にあり、文化芸術以外にも観光資源のある街で劇場が担う役割を考えた時、まずはプログラム創造に注力し、KAATをより広く多くの方に知っていただくためのカラーをつくろう、と腹が決まりました。

串田さんが長野県の松本市で、まつもと市民芸術館を拠点に市民を巻き込む多彩な事業を展開していく様子は羨ましかったけれど、中華街や山下公園を含む、既に確立したイメージがある大きな街・横浜でそれをやるのは少々厳しい。後から現れた劇場を認知していただくには尖った、先鋭的な活動や創造を行う必要があると考えた。だから個人的には、当時のKAATが「演劇的事件を起こせる場」でありたいと思い、“しでかす劇場”というスローガンを胸の内に掲げていました（笑）。それも、先輩方からの学びですね。

— それまでの、ご自身の美学を硬質かつスマートに創作活動に反映してきた白井さんが一転して、周囲をあおるワイルドな闘い方をKAATで提示されたのが新鮮でした。

白井 劇団時代は創作や言動に於いて、自分の中の熱い部分をクールに提示しようと装っていたのだと思います。先輩世代のアングラ演劇には大いに薫陶を受けていますが、反面演劇を一部の特別な人たちのモノにしてしまった。ならば自分たちの演劇は、幅広い誰もが観られるようにしたいな、と。でもKAATの属する公共の枠組みでクールなことをしても、公共の理屈やルールに絡め取られ、劇場として健全に成長できないと思ったんです。ならば免疫をつけるため、内部から己の野生を刺激するエッジの効いたプログラムをつくり、届ける必要があるという決断でした。

外部の表現者と組むことの意義

— 観客など対外的な戦略だけでなく、劇場内部の組織や属する官公庁へもその戦略の理解・共有を求める双方向への働きかけ、その姿勢が、白井芸術監督のKAATにおける活動の独自性に思えます。さらに、次世代のアーティストにKAATを場として開き、共に創作する機会を増やしたことも画期的です。

白井 表現者は自分が一番大切でオンリーワンだと思っているので（笑）、別の表現者、特に刺激や尊敬の対象に落とし込める先達では